はじめに：趣旨説明

片岡邦好(愛知大学)

プログラムに先立ち，企画担当者の愛知大学・片岡より本ワークショップの趣旨・目的などを簡単に説明させていただきたいと思います。本日ご登壇いただく先生方は「言語変異」という学問分野をご専門になさっています。言語学という学問の中に「社会言語学」といわれる分野がありますが，その中でも「言語変異」と言われる，ことばの変化を扱う分野の研究をされている先生方です。

さて，「言語変異」とはいったい何なのでしょうか。当たり前のことですが，言葉は刻々と変化します。その変化を捉えるために，例えばこれを豊橋名産の「ちくわ」に譬えてみましょう（図 1）。輪切りにしたときの切り口を「縦軸」で，ちくわの端から端までを「横軸」としましょう。どのようなことかといいますと，今この時に，地域によっても，集団によっても，特定の民族によっても，性差や年齢によってもことばは一様ではありません。これが縦軸に当たり，「共時的」な変化にあたります。その一方で，時間の変遷に伴って歴史的に変化する，つまり非常に長い時間のスパンのなかで変化する特徴が横軸にあたり，これを「通時的」な変化と呼んでいます。

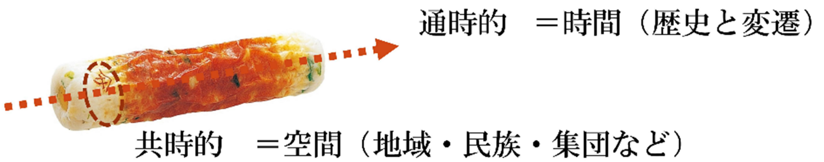

図 1　通時的・共時的変化

このように，ことばはこの二つの側面で大きく変化するわけですが，どうも乱雑に，でたらめに変化している訳ではないというのが，本日の登壇者の方々が持っている共通認識だと思います。一見，自由きままに変化しているように見えますが，その後ろに何か体系や，もしかしたら規則のようなものがあるのではないかという

認識に立って，それを見つけることで，人間の心や社会をよりよく知ろうとするのが「社会言語学」の目的かと思います。

本日のシンポジウムでは，北は北海道から南は九州まで，登壇者の方々が独自の視点で，さまざまな変異の背景について話をしてくださいます。各々の方言が地域や集団，場合によっては，個人によって，気付かないうちに，あるいは意図的に変わるときもありますが，どのように，なぜ変化するのかという視点からお話しいただきます。この点で，おもに共時的な変化が中心にはなりますが，それを生み出す歴史的，通時的な変化にも目を向けることになるでしょう。

方言，そして言葉全般については，会場の皆さんを含め誰もが，自分なりのいろいろなお考えをお持ちのことと思います。今日の発表のなかで，皆さんに納得していただける部分，そうでない部分があるかと思います。ぜひ，そういったご意見，ご質問は，質疑応答の際に出していただければ非常にありがたく思います。そうすることで，多くの人に言語変異の研究をより身近に感じていただければ，企画者としてこれ以上の喜びはありません。